
どこにも行けないよ僕も
あなたも
くらくてあたたかい
本文61ページ

父方の祖父が亡くなった

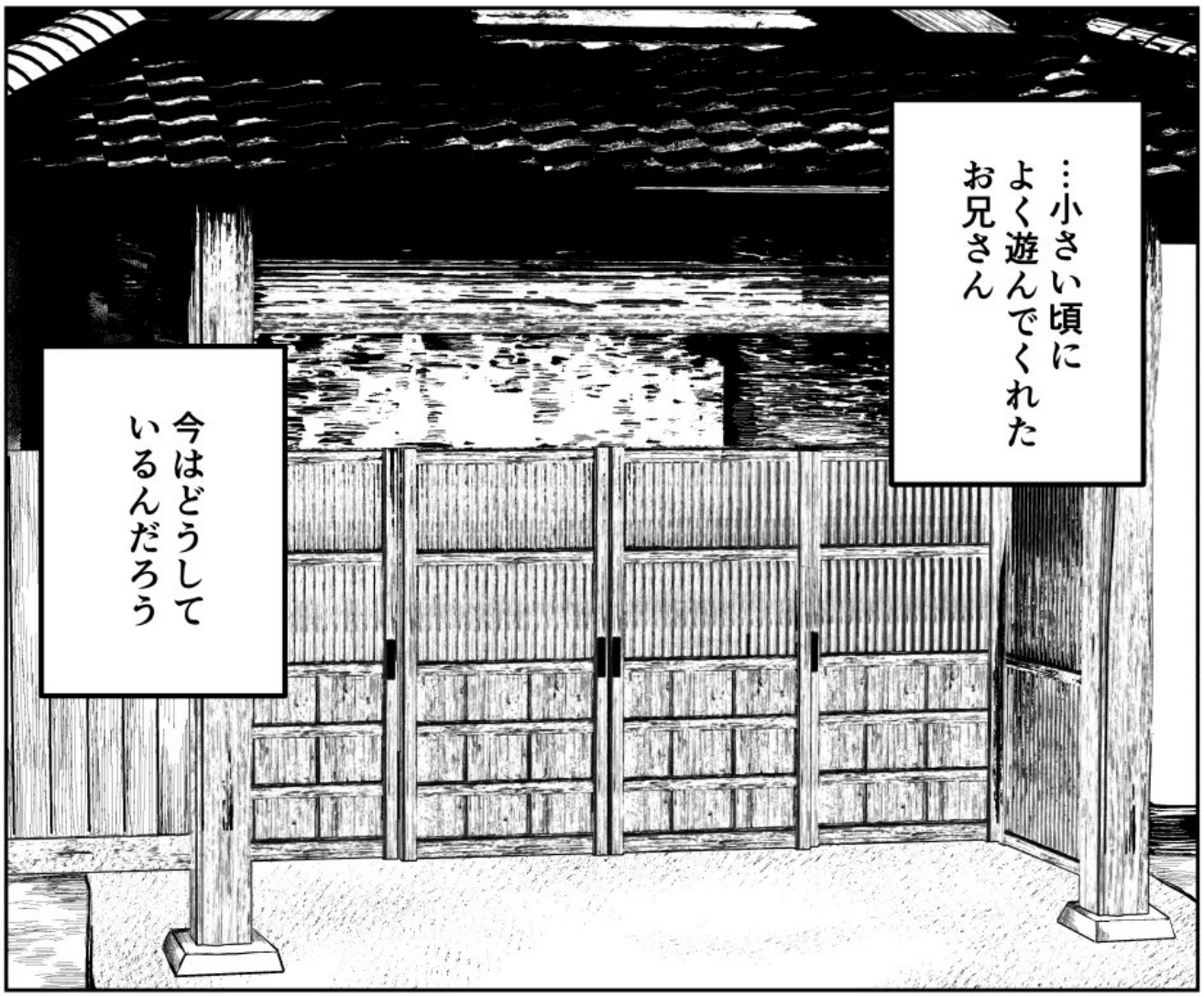
祖母は先に亡くなっており
祖父は山奥の屋敷のような
一軒家で1人で暮らしていた

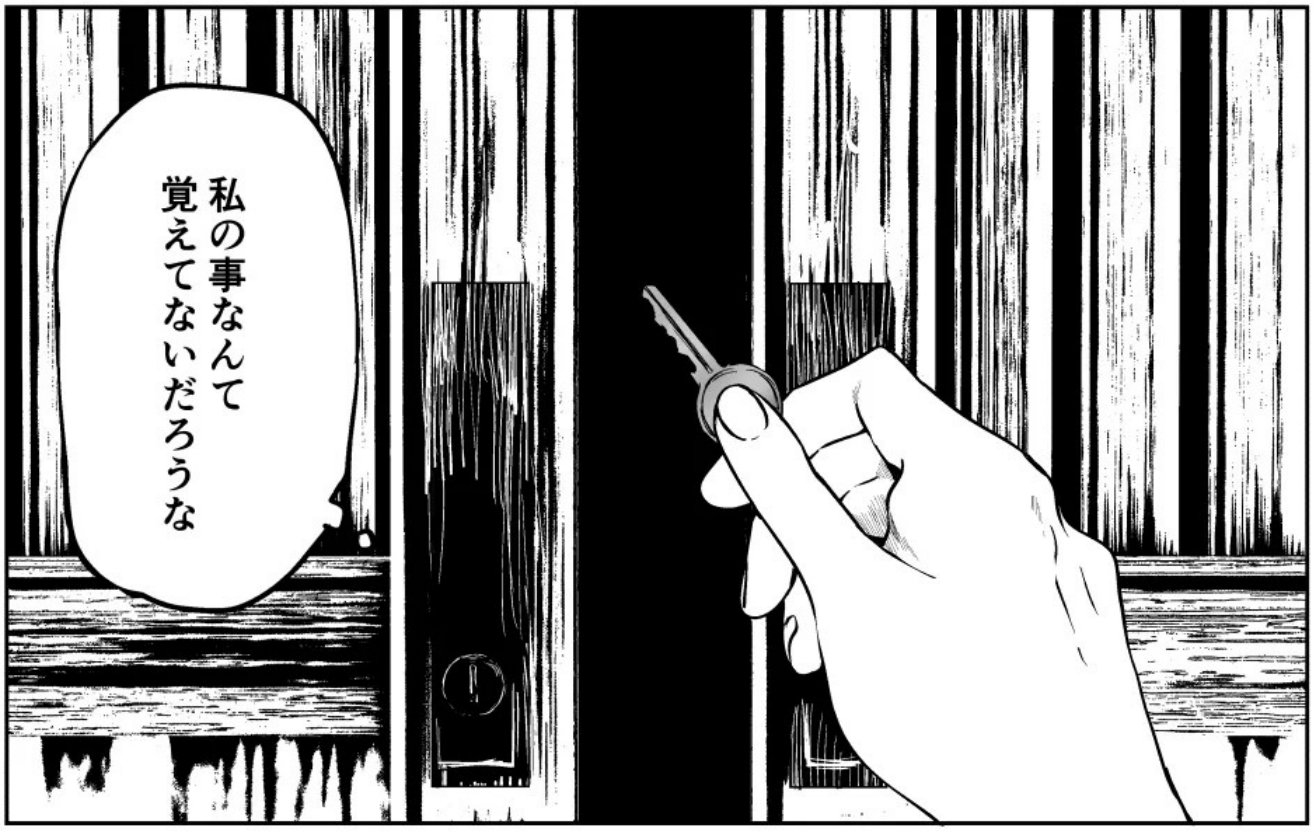
近場に住む親族はおらず
祖父が亡くなった時点で
家は手放す予定だったが
私が相続し、住むことにした

ネット環境と車
この二つがあれば仕事にも
生活にも不自由しない

いつまで居られるかは
わからないけど当面は家の
管理をしたいと思った

それにあの家には
楽しい思い出も多かった


…小さい頃に
よく遊んでくれた
お兄さん
今はどうして
いるんだろう


私の事なんて
覚えてないだろうな


おかえり



ずっと







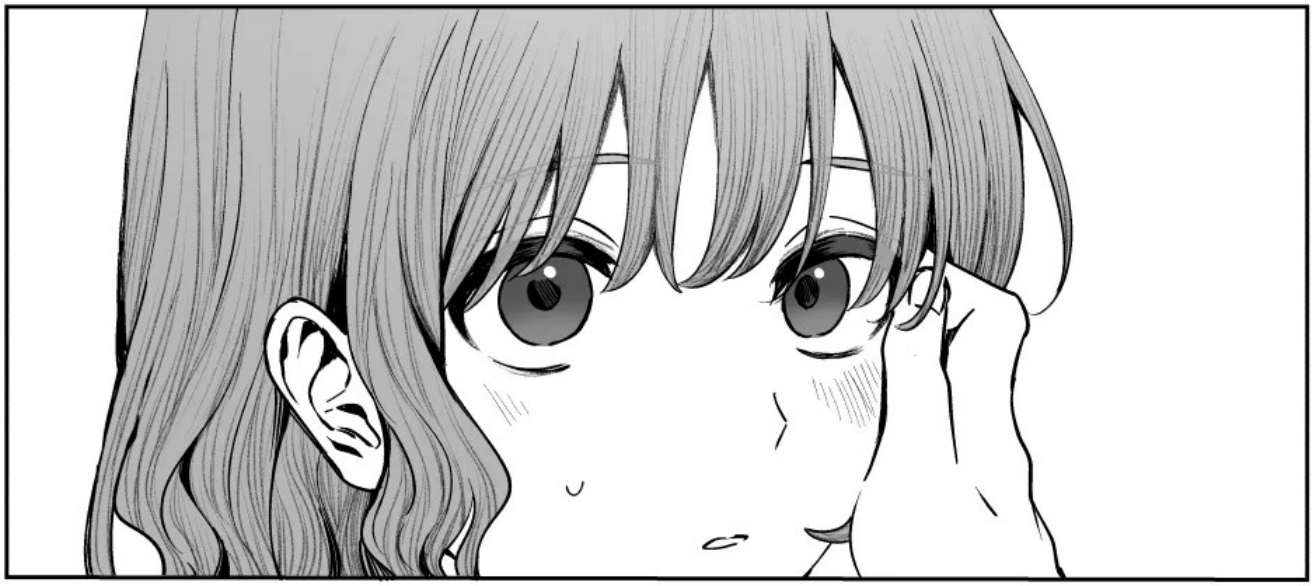



すみません色々
何から何まで…


荷ほどきのお手伝いまで
してもらったのに
先にお風呂も
いただいちゃって…


あなたが
帰ってきて
くれたんだもの
してほしい
ことがあったら
なんでも言って
まさか五右衛門風呂から
檜のお風呂にリフォーム
してるとは…
掃除なんて絶対
行き届いてないと
思ってたのに…
お兄さんが管理
してくれてたん
ですね
これなら傷んでる箇所
少し修繕するだけで
問題無く住めそうです
エアコンなんて昔は
一台もついてなかった
んですよ!?
そうだね
いつか
あなたがここに住むと
わかってたのかな


そう
なんですかね…
それにしても
お兄さん…
見た目全然変わってない…気がする
なんなら私よりも若そうなくらい
流石にそんなことはないと思う…けど
思えばお兄さん以外に
気になる人できなかったなぁ




大きくなったね

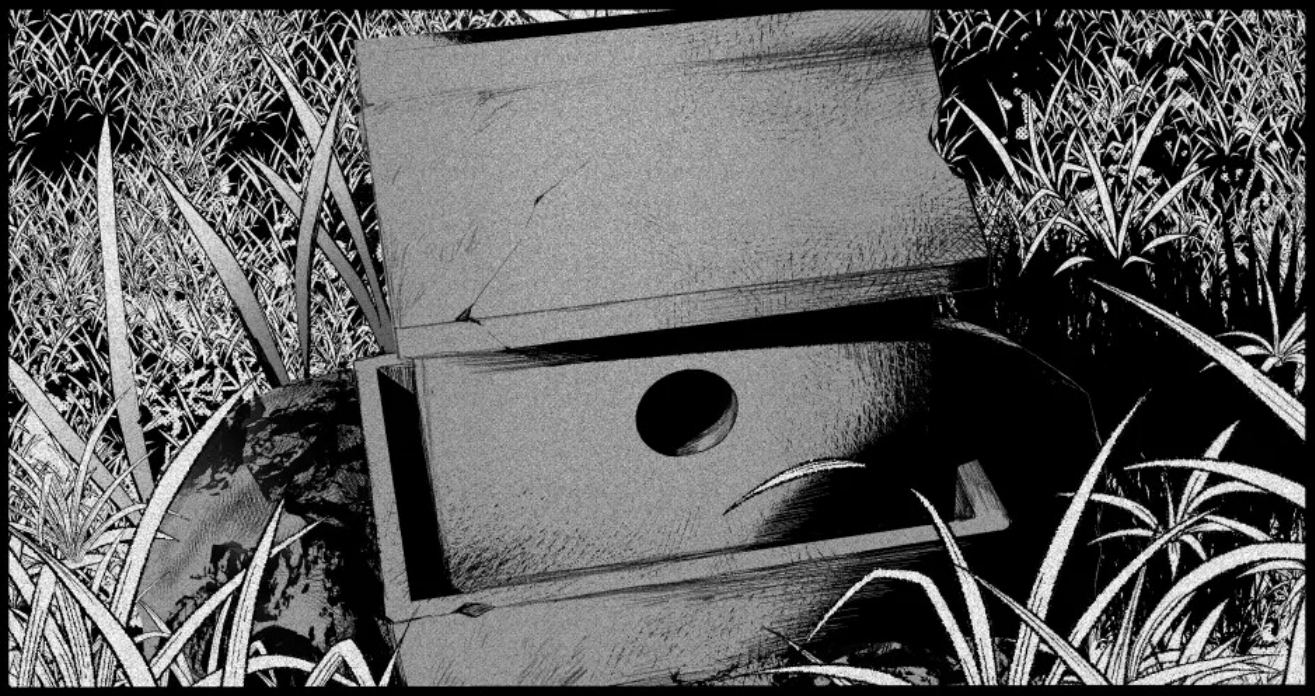

本当に


お兄さんは
変わってない…
ですね…
今日は疲れたでしょ
隣の部屋に布団が
敷いてあるから


おやすみ
…おやすみなさい

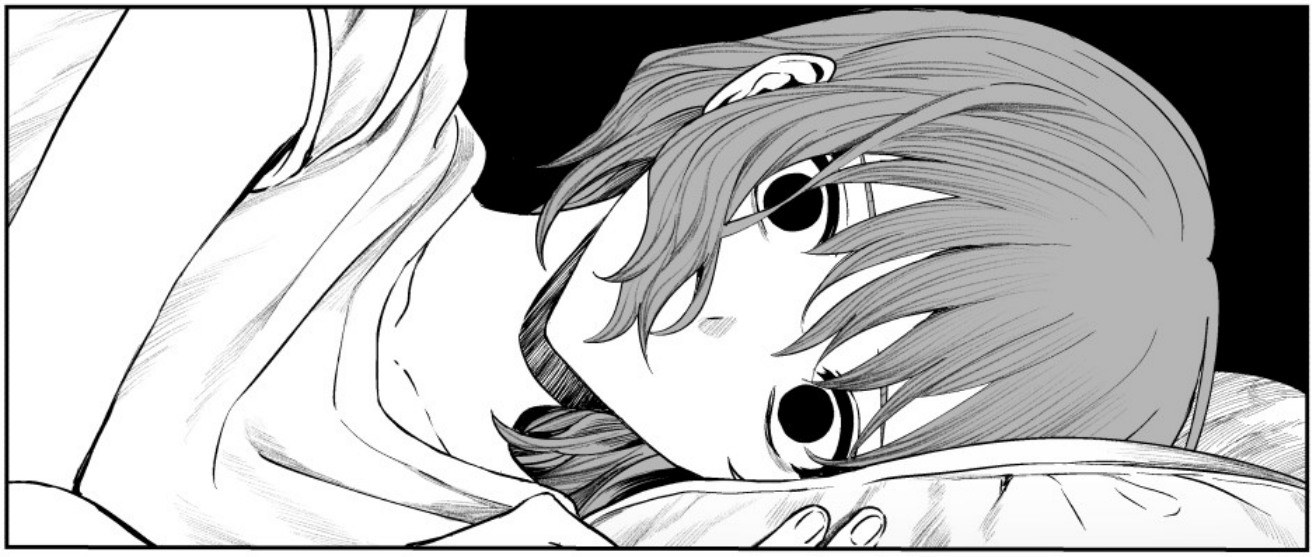

お兄さん
怒ってたように見えたな
そもそも
あんなふうに
喋る人だったっけ
昔はもっと…





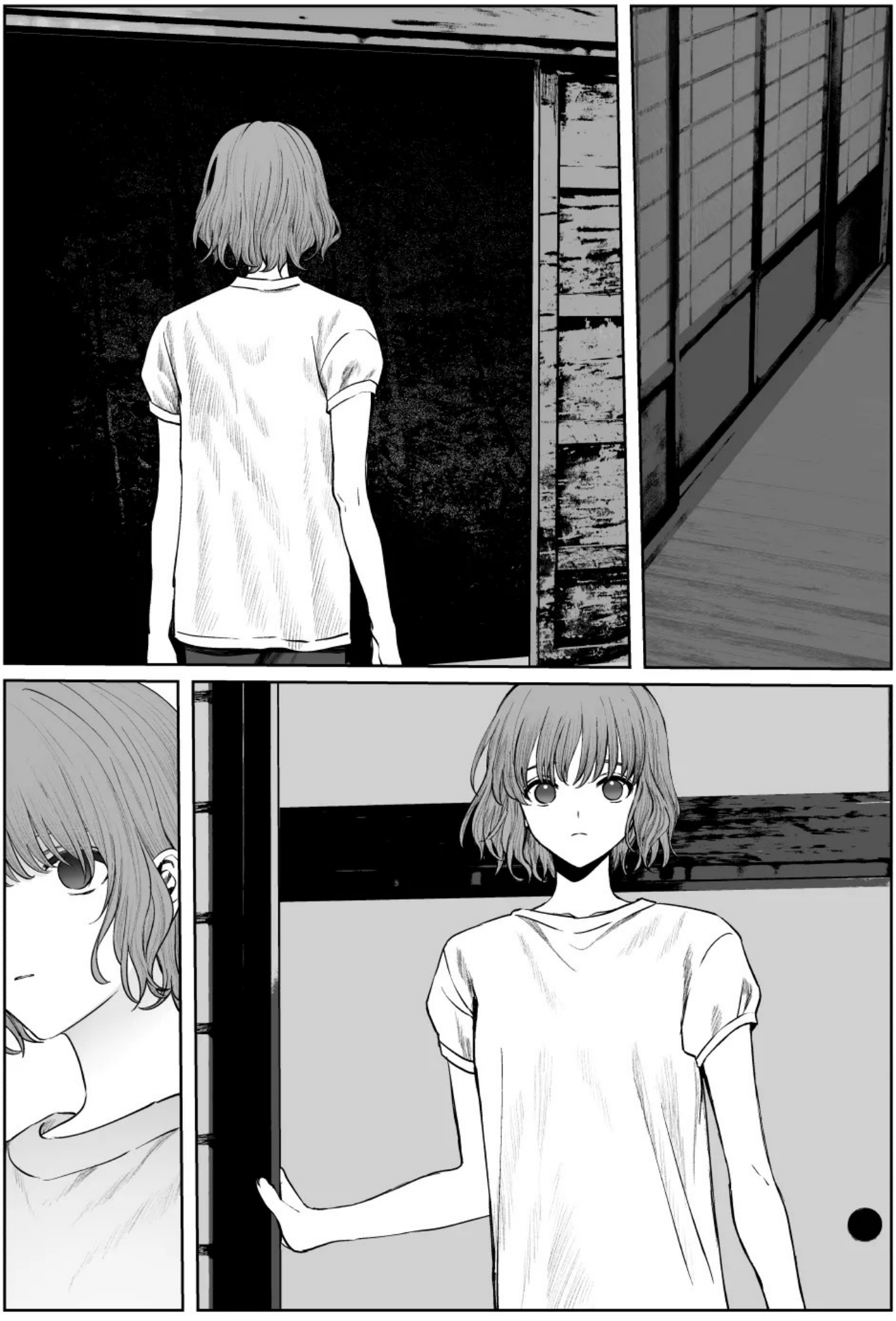


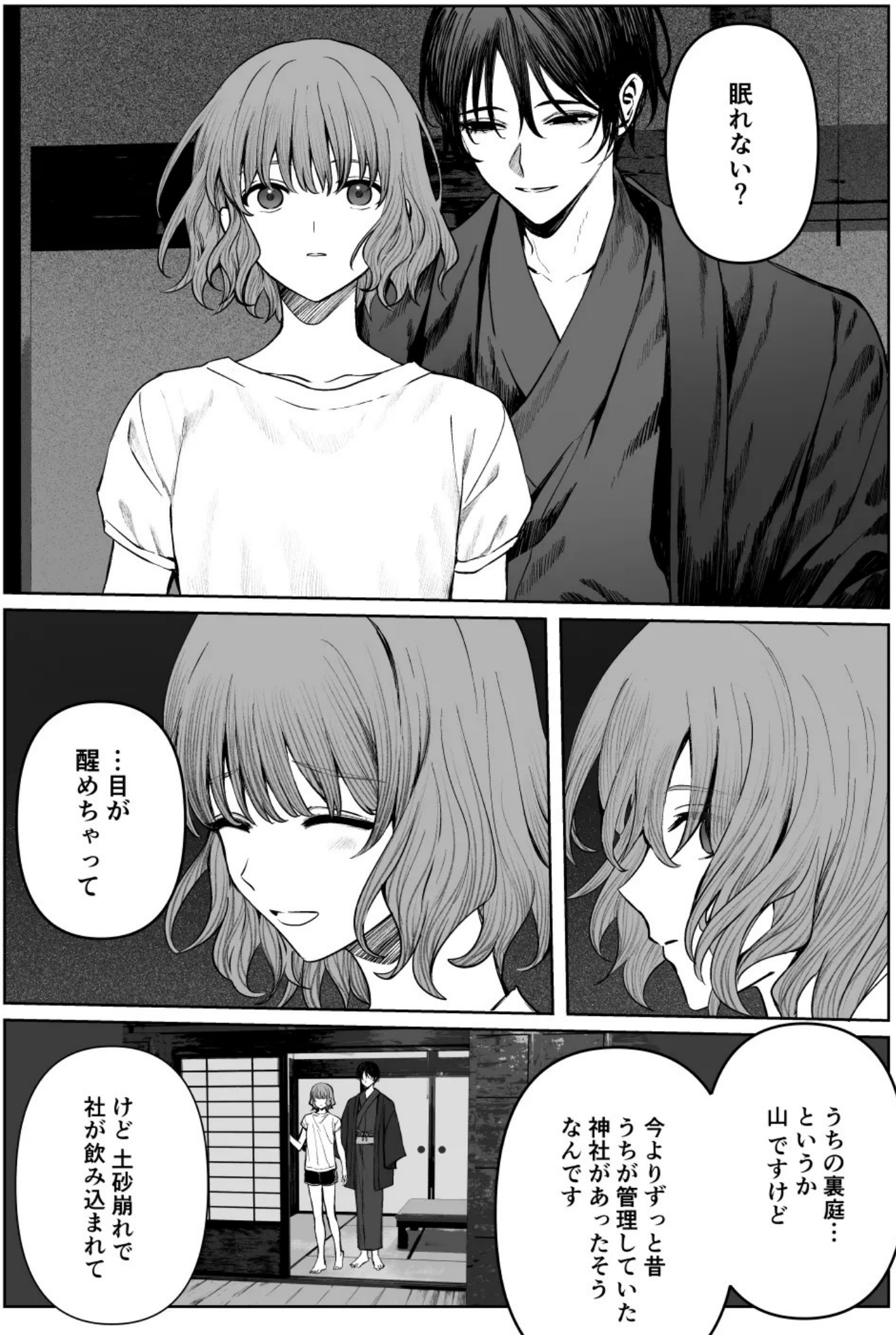

山にかえらなきゃ




……


眠れない




眠れない？
…目が
醒めちゃって
うちの裏庭…
というか
山ですけど
今よりずっと昔
うちが管理していた
神社があったそう
なんです
けど 土砂崩れで
社が飲み込まれて


それから
それまでみたいに
作物に恵まれなく
なって…
今は全然
そんなこと
ないですけど
ここは暮らすには
ちょっと不便ですし
時代もあってみんな
山を降りて
私が小さい頃はまだ
近所にも人の住んでる
おうちがあったのに
今はもう
この家だけ


うちの敷地にも
祠があるじゃ
ないですか
私がいなくなったら
本当にもう誰も
管理する人がいないの
かなって

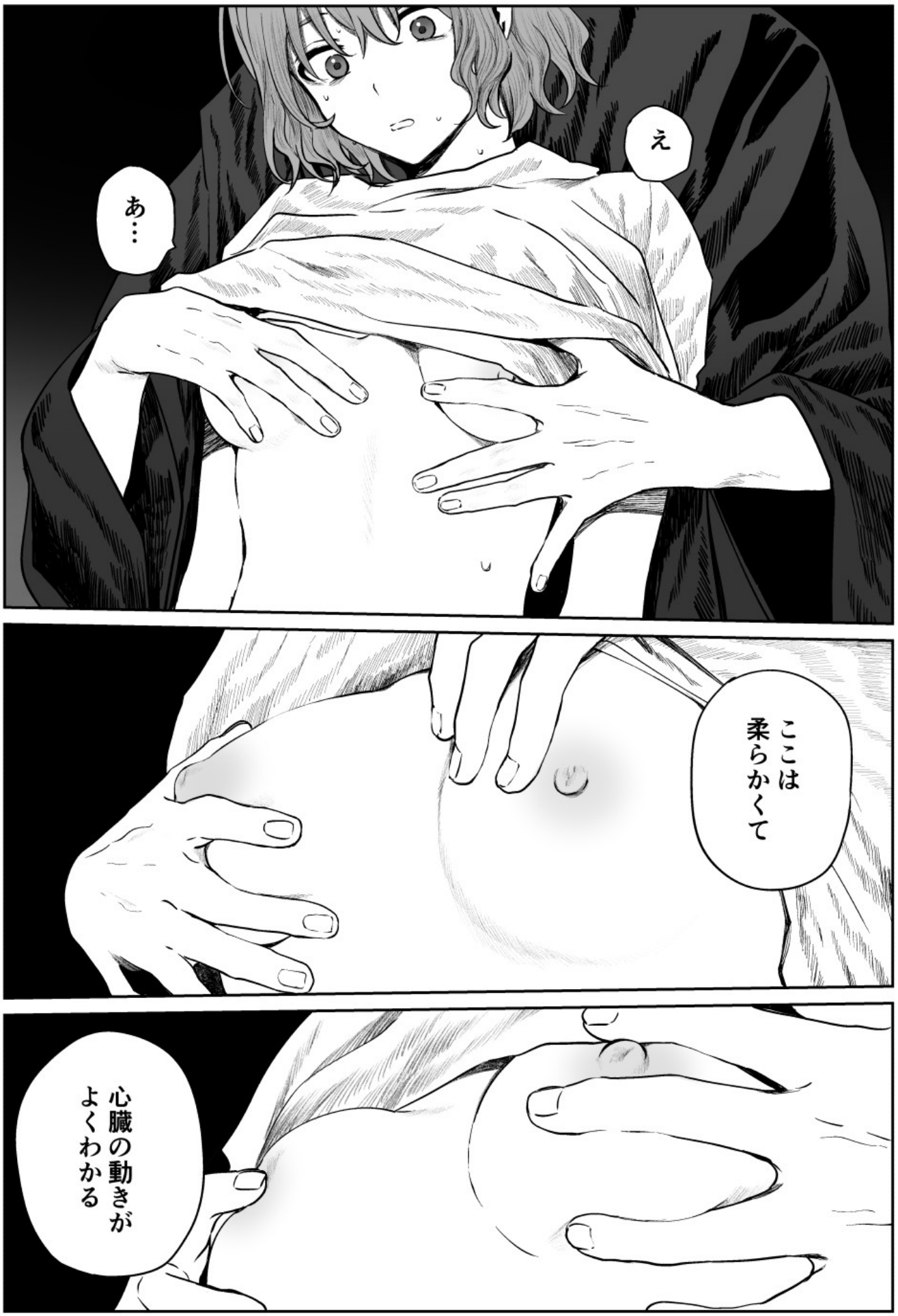

社がなくなって
人も居なくなった
土地の神様は
どこに
行くんでしょうね


どこにも
行けないよ
僕も
あなたも


あなたがここを
訪れなくなって
十三年
考えてたんだ
あなたが
帰って来た時
どうすればあなたを
この家に縛り付けて
おけるか
こんな簡単
なこと
どうして
僕は…
いや…
今となっては
どうだっていい


あなたの願いは
叶えたのだから
今度は僕に返して
あなたの全部を
ちょうだい


……
あれ？
そういえば
お兄さん
なんでこの家に
いるんだろう
お兄さんが住んでる
場所 知らない
お兄さんの
名前も知らない
知ろうとさえ
しなかった
なんで私
何も気に
しなかった
んだろう
お兄さんって『だれ』？


え
あ…
ここは
柔らかくて
心臓の動きが
よくわかる


このまま
少し力を
加えただけで
潰せてしまえそう
せっかく生きている
あなたに
そんなことは
しないけれど
…お兄さんのこと
ずっと気になってた
けど
けど…さすがに
いきなり こんな
こんなの絶対
ダメなのに
だから


だから…
抵抗しなきゃ
いけない　はず
なのに
あ…
スリ
スリ…
は
はぁ…
はぁ
あっ
あ
あっ
わり
わり
はぁっ
わり
あっ
はぁ
はぁ
はぁ
やめてって
言わないと
いけないのに…
ぎゅ〜
ビクッ
あ♡

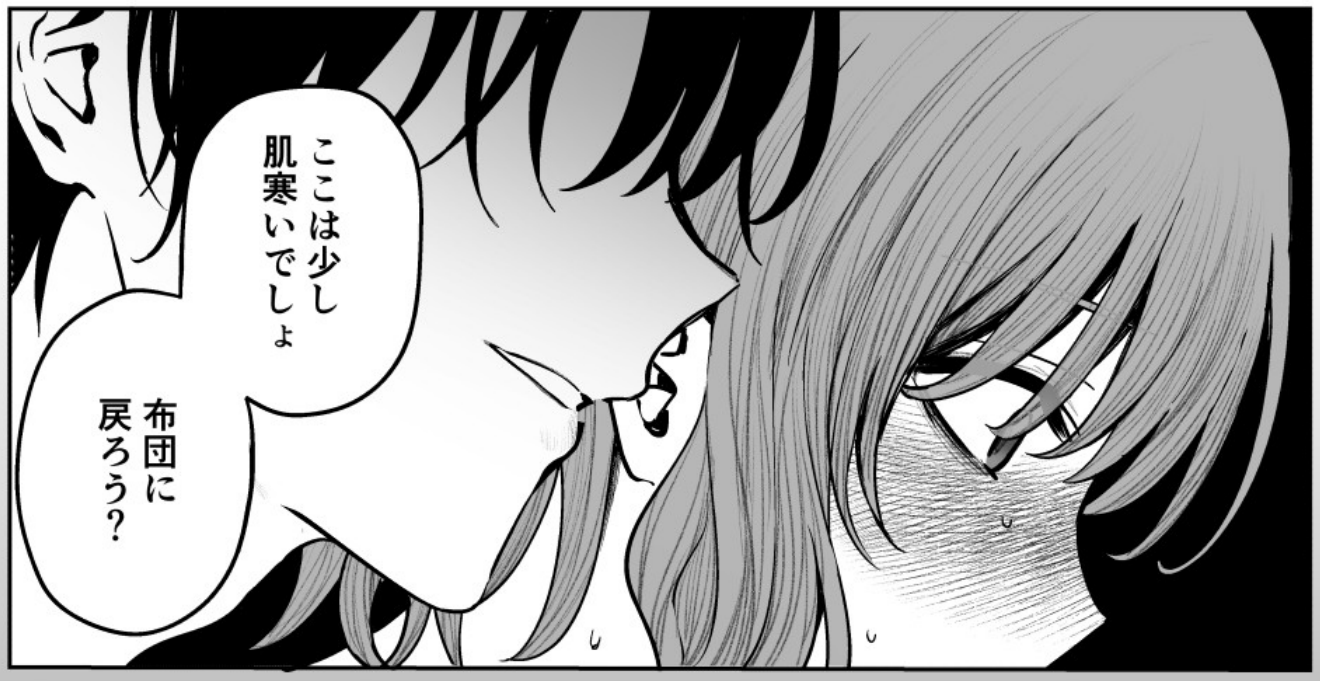

きもちいい…
はぁ
はぁ
うれしい…
はぁ
はぁ
はぁ
でも
かえ
ら
ない
と…
……
どこに
帰るの？
ここがあなたの
望んだ場所なのに


私
ちゅ
なんで
ふっ
ん
ちゅく
ちゅぷ…
はっ
はぁ…
はぁ
……なんで
抵抗しなきゃ
いけないんだっけ…


あなたは
ただ
僕だけを
感じて
僕だけを
見ていて
ぬち…
はぁ
あ
はぁ
あっ
ゆ
ゆび
はいって…
あっ
あっ
はっ
ぬち
ぬち
ぬちゅ


はぁ
はぁ
ふっ
ぬちゅ
ん
はぁ
ふっ
ん…
ぬち
あっ
ん…
ぐり
そこっ
やだっ
ぐり
ぐり
きもちいい
とこ
指で
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
掻きまわされて
お兄さんに
触られるとこ
全部なんで
こんな…
ん
ぴく…
ん…
あ
ダメ
ア
ー
ア
ー
これ
イ…


あ…
はっ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
よかった
気持ちいいこと
嫌いじゃないみたいで


ここは少し
肌寒いでしょ
布団に
戻ろう？

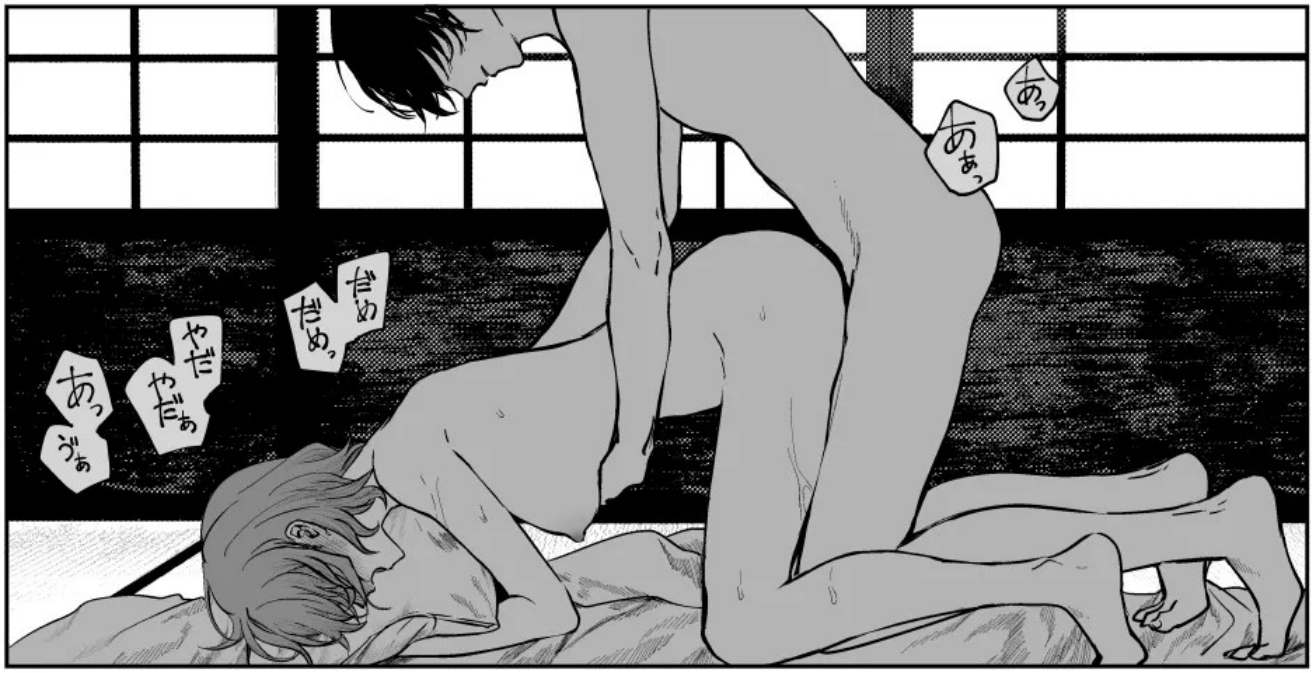


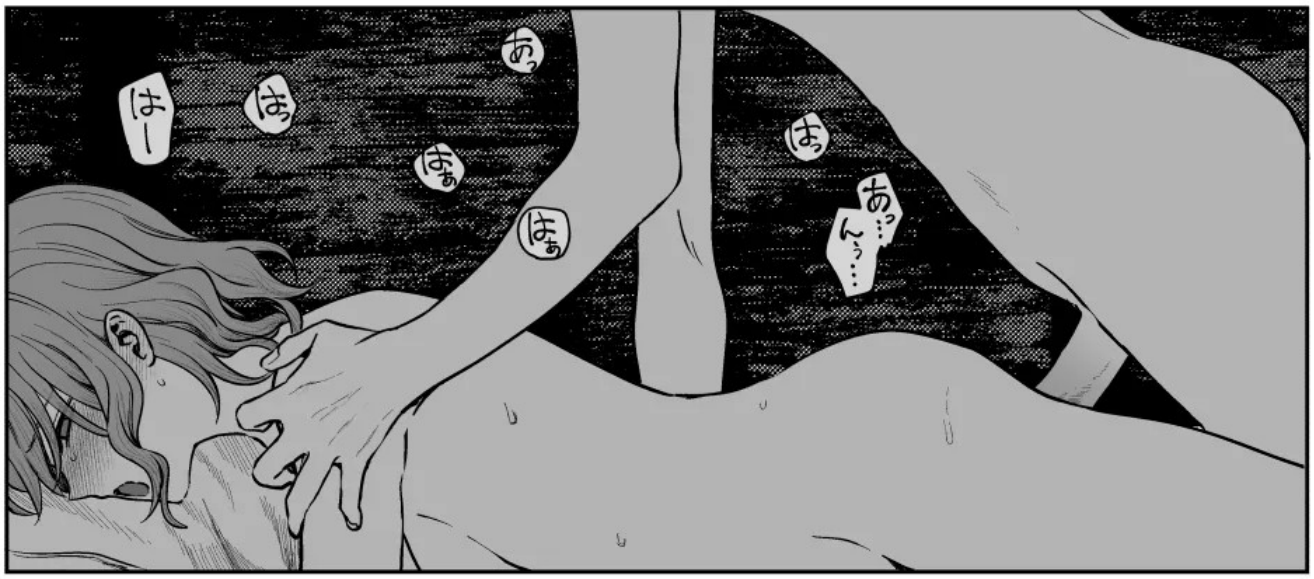
……

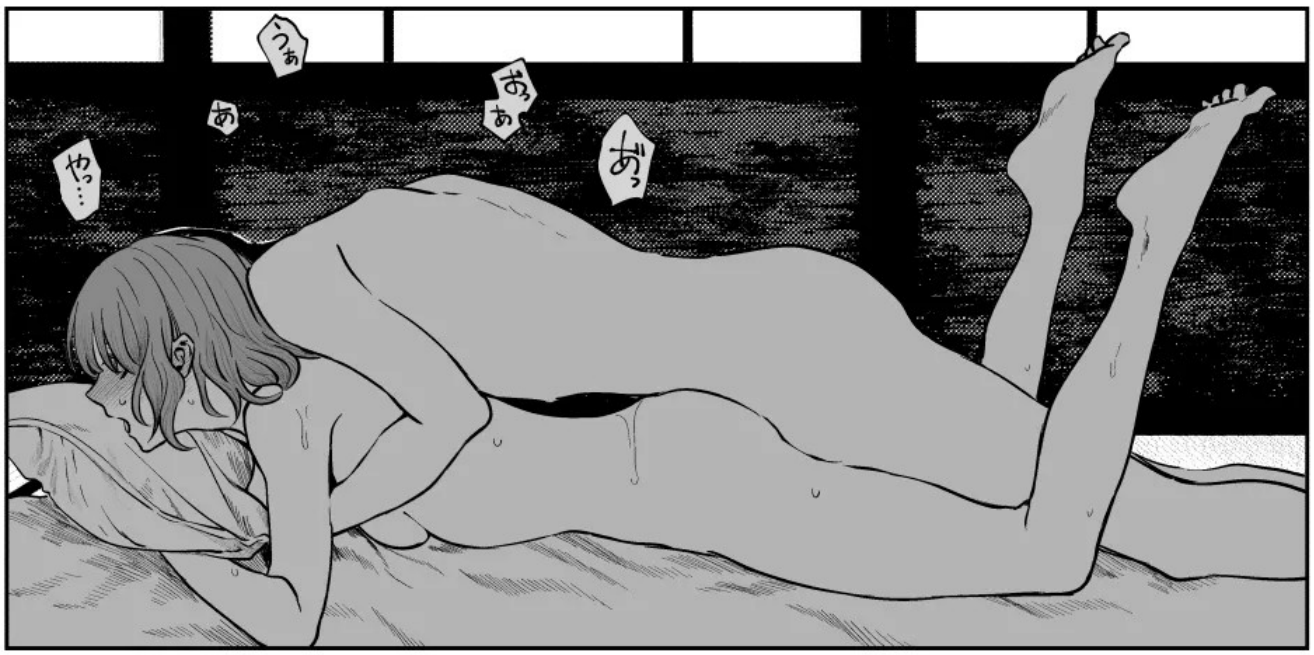

はぁ
あっあ
ぱちゅ
ぱちゅ
はぁ
は…
あぁ
はー
ぱちゅっ
あっあっ
はぁ
あなたの身体は
どこも温かいね
ぐちゅ…
ぱちゅっ


あなたの体温が
恋しかった
ずっと
ずっと…
けれど
同じくらい
生きている
モノって
腹が立つ


ひどく
憎いのに
いのちの
あたたかさに
どうしようもなく
焦がれてしまう
今なら理解
できる
僕らって・・・
そういうふうに
できてるみたい
あっ
あぁ
ぱちゅっ
ぱちゅ
ぱちゅっ
ちゅこ
ちゅこ
ちゅこ
浅いとこっ
執拗に…
ごしごし
されるの
きもちいい


あっ
あぁっ
だめ
だめっ
やだ
やだぁ
あっ
うぁ


あっ
はっ
はー
はぁ
はぁ
はっ
あっ…
んっ…


うぁ
あ
おっ
あ
あっ
やっ…


おっあ…っ
はぁ
あぁ
うっ…
ふっ
う
ん


はー
出てる…
中…
はー




ほら
もう少し
がんばって
えっ


はぁ
はぁ
はっ
ま待って…
まだイったばっかり…
あや…
おあ
あぁあッ…


一気に…
おくっ
までっ…
あっ
あぁ…
はぁ
はっ
ふふ
膣内(なか)痙攣してる
あなたの
深いところまで
侵してる
僕の形
ちゃんと
覚えてね
ビク
あっ
はぁ
はっ
あっ
おっ…
あぁっ


あ
やだ
はっ
あっ
また
すぐ…
これ
はっ
はっ


ちゅ
ちゅぷ
ちゅ
ふ
ちゅ
ふ
ちゅ
ちゅ
ぴ
ちゅ
な
なぁ
はー
はー


気持ちいい
苦しい
お兄さんにされること
全部
気持ちいい
私の身体…
ずっと
こうされたかった
みたいに
お兄さんを受け入れて
ずっと
ずっと…？
あれ　わたし
どこに帰ろうと
してたんだっけ
ここが私の帰る家なのに
ここが…
私の…


あっ
あっ
ぱちゅっ
ぱちゅ
あぁっ♡


はー
はー
はー
はぁ
はー…
はぁ
ガリ
ビッ…
あ…
キャ…
はあ
ふふ


かわいいね
？
お…
あ
あ…
？


え
いま
うそ……
？
？
なんで
はぁ
はぁ


愛しいって
こういう気持ち
なのかな
あなたは全部
教えてくれるね…


あっ
うぁ…
ビク
あっ
あ
はー
はー
はー


ああ…
そっか
私もう
お兄さんの…




山の神になんて
渡すものか
この子はもう
僕のものだ


それが気になる？


目が
合った。
このちっちゃいのにも
神様は住んでるの？
どうだろう
草ばっかり…
今は誰にも
管理されて
いないから
もう家に
お入り
ここはすぐ
暗くなるよ




きみは生傷が絶えないね
山で遊ぶの楽しいんだもん
おにいちゃんずっと1人でいるの？
お母さんお父さんは？
どうだろう…そう呼べる存在はいたのかもしれないけど気付いた時にはここに一人でいたから
ここでずっと人を見ていたんだ
わたし大きくなったらここに住もっかな


どうして？
だって
そしたら毎日
山で遊べるし
お兄ちゃんも
寂しくないでしょ？
寂しい…
そう
そうなんだ…
そうだったのかな…


神様って
どうやったらお願い
聞いてくれるのかな
…何を
お願い
したいの？
おうちでできる
仕事ができたら
いいなーって
小説家とか？
そしたら
ここで暮らせる
でしょ？
お願いをする時は
代わりのモノを
差し出すんだよ
代わりのもの？
きみの
大事なものや
きみ自身


神に人の道理は通じない
支払う代償の大きさを
人が量ることはできない
だからよくわからない
ものに拝むことは
あまりしない方が良い
お願い叶えてくれるなら
なんでもあげるのになぁ
……


雪 全然
溶けてない
…手
赤くなってる
手袋は
どうしたの
べちょべちょに
なったから
おいてきた！
それにこっち(素手)のが
作りやすいんだもん



ゾッとした
人のやわらかさ
その暖かさに

ほしい

ほしい

人の子

あたたかい血

いのち

生きているモノ

欲しい

欲しい

欲しい


この数年は
何もなかった百年より
ずっと長く感じた
たったの数年が何故
こうも長く感じるの
だろう
あの子はまだ
生きているのかな
恨めしい
僕はすっかり
醜くなって
しまったよ



あの子はきっと
『山』につれて
いかれる

それならば
いっそ…

けれど
今の僕とアレに
何の違いがあると
言うのだろう

どうして あの時
声をかけて
しまったんだろう

自身の招いた
過ちを贖えると
したら……




どうか
どうかあの子が
二度とここへ
戻ってきませんように


あの子
あなたの実家を
相続したいって
言ってるのよ
親戚はみんな遠方で
管理できるような人は
誰もいないし
手放すくらいなら
あの子に任せてみても
いいと思うのだけれど
山に行きたがる繭を
不気味がって実家に帰るのを
控えようと言い出したのは
お前だろうに
あれは繭がまだ
小学生頃の話で……
結局あの時だけで以降
そんな素振りは
見せなかったでしょ？
それはまぁ
そうなんだが
繭は昔から田舎やら
古い建築物やらが
好きだからなぁ



ただいま

・身長：180㎝くらい

出会った頃にはもう繭が『山』に魅入られ
逃れられないことを察していた。
「家でできる仕事が良い」という
繭のささやかな願いを叶え、
『山』に攫われるくらいならと、この家に留まらせるため
自分の『モノ』にした。

自身の現在の身分が神であるという自覚が無い。



・身長：160㎝くらい
・23歳

『山』に呼ばれて帰って来た。
実家の周囲には自分と同じ
歳の頃の子はおらず、
帰省の度に遊んでくれる「お兄さん」に
惹かれていった。





千景（ちかげ）

かつてこの地で神として祀られたただの人
山を信仰する神社で生まれた双子の片割れ。
この地では当時不吉とされていた双子を間引かず生かしていた。
双子が生まれてから不作や災害が続いたことから
山の神の代弁者であるはずの血筋が山に穢れを持ち込んだせいと考え、
跡取りとなるはずであった兄を7つの頃に人身御供とした。
■■家の敷地にある祠は彼を祀っている。
その後、一度だけ大きな土砂災害が起きて以降山は静かになった。
双子の弟は体があまり強くなく、若くして亡くなった。
千景の姿は弟が死んだ際の年齢で止まっている。

人として生きていた頃の記憶はない。
千景という名は失われており、今の身分における名前は無い。

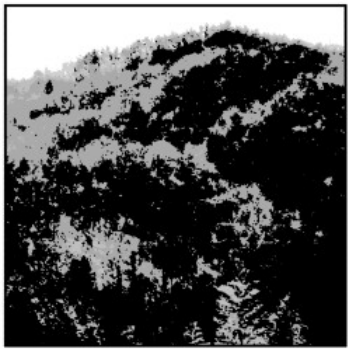


繭（まゆ）

田舎の自然に惹かれ、野生生物を好む。
自然に対する無意識の信仰心や畏敬の念が強く、
『山』に見つかり『山』に捉えられた人の子。

現代において信仰は失われつつあれど、幼少期の繭の態度から
祖父は危惧し、せめてもと家を綺麗に保っていた。

お兄さんの存在は山や川と同じ
そこにあり当然なもの



三影山（みかげやま）

■■家のある山であり、■■家が管理していた山。
山そのものを聖地とする山岳信仰の山。
磐座や鳥居の痕跡はあるが象徴とされる神社は現在は存在しない。
詳細な記録無し。

人によって切り開かれた『山』は人を視ている



入れたかったけどどうにもできなかったカット

あとがき

この度は当作品をお手に取っていただき誠にありがとうございます。
はじめての作品なのでせっかくならと好きな要素を詰めまくって
いたら正気度が低い子たちになってしまったので
次があれば正気な子を描きたいです。
夜の山の中って黒すぎてこわい

笠と坂
カサザカ ヨヨ
X(Twitter)：@kasazakayoyo